ISSN 2186-5647

8-8

地域の見守り協力に対する家族介護者のプライバシー意識に関する研究

日大生産工（院）　○樋口　明浩
日大生産工　岩田　伸一郎

1. 研究の背景と目的

地域包括ケアシステム[注1)]を実現していく中で、高齢者や認知症患者を地域で見守っていくために、先行研究として、認知症介護での見守り協力に関するアンケートが行われている。70歳以上の親を持つ介護未経験者（以下、被験者A）350名と認知症の親の在宅介護経験者（以下、被験者B）150名を対象者とし、交流と認知症の状態の共有について報告している。

本稿では、そのアンケートデータを利用し、先行研究で不十分だった、求める見守り方と情報の共有に関して、住民との距離関係をカテゴライズした「距離感」、住民との交流関係をカテゴライズした「交流レベル」の関係性により分析を行う。それにより、地域の人に対し、どういった関係の人たちにどのような見守り方や情報の共有を望んでいるのかを明らかにする。

またデータとして、見守る状況に着目した、普段見かけた際（以下、通常時）と様子のおかしい際（以下、非常時）といった違いや、介護における立場的な影響に着目した、介護を行い見守る際（以下、見守る場合）と自らが介護され見守られる際（見守られる場合）というような状況別に各アンケートが行われており、それぞれの場合において傾向を明らかにし、比較することで、プライバシーにおける微妙な意識の変化が明らかになるのではないかと予想をたてた。

また、全体の傾向とは別に、個人の傾向を集計するため、データをパターンに分類し集計を行う。

以上によりプライバシー意識の傾向を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

アンケート内容の詳細を表1に示す。本稿で対象とする設問は、両親が認知症等になったことを想定した（被験者Bは実体験）③「家族介護者の立場として、〔見守る場合〕のプライバシー意識」、回答者自身が認知症になったことを想定した④「被介護者の立場で〔見守られる場合〕のプライバシー意識」の範囲である。また、アンケートの回答項目は、表2の通りである。

分析方法として、集計するにあたり、2Dによる棒グラフでは、回答に対し、一つづつでしか比較できないため、今回は3Dにより幅と奥行きを出すことで、マトリックスを作成する。それにより、少しの変化を、全体の傾向の一部として読み解き、傾きといった特徴を発見できると考えた。

これにより、第3章では、〔距離感〕と〔交流レベル〕によるマトリックス表を作成した。さらにそれを用い「見守り方」と「見守る状況」、「介護の立場」によるマトリックス表を作成し、通常時と非常時の比較、見守る場合と見守られる場合について比較を行い、求める見守り方ごとに変化を把握する。

第4章では、共有情報ごとにどの程度、共有できる

表1 アンケート項目

	設問内容
①基本情報	1) 性別, 2) 年齢, 3) 年代, 4) 住まい（都道府県）, 5) 認知症の親の介護経験の有無（対象別）, 6) 両親の年齢（年代）, 7) 家族介護者の居住形態, 8) 現在住まう地域の居住歴, 9) 以前も現在住む地域に住んでいた年数, 10) 家族構成, 11) 被介護者の住う距離 計11項目
②交流レベル	12) 被介護者と地域住民との交流の有無　先行研究：対象範囲 13) 家族介護者と地域住民との交流の有無
③見守り対象者を見守る	14) 認知症の状態を共有できる地域住民　本稿：対象範囲 15) 地域住民が被介護者を普段見かけた時求める見守り方法 16) 地域住民が被介護者を見かけた際様子がおかしい時に求める見守り方法 17) 状況ごとに位置情報の共有をためらう地域住民
④回答者自身が認知症となり見守られる	18) 認知症の状態を共有できる地域住民 19) 地域住民が普段、家族介護者を見かけた際に求める見守り方法 20) 地域住民が家族介護者を見かけた際に様子がおかしいと感じた時求める見守り方法 21) 状況ごとに位置情報の共有して欲しくない地域住民
⑤見守り方法の評価	22) 見守る側視点の見守り方法の必要度 23) 見守られる側視点の見守り方法の必要度

表2　回答項目

■見守り方「通常時」
積極的に声をかけてほしい（声掛け）
声掛けは不要だが注意を払って欲しい（注意）
特に何も望まない（望み無し）
■見守り方「非常時」
積極的に接触を求める（接触）
接触は不要だが連絡がほしい（連絡）
特に何も望まない（望み無し）
■交流レベル
普段の交流がない方（交流なし）
挨拶を交わす程度の方（挨拶）
世間話を交わす程度の方（世間話）
普段から相談できる方（相談）
■距離
ご近所（ご近所）
町内もしくは同じ共同住宅内（町内）
最寄り駅圏内（最寄り駅）
商店街や店舗スタッフ（商店街）

表3　回答パターン分類

距離感	ご近所	町内or共同住宅	最寄り駅圏内	商店街や店舗
A	○	○	○	○
B	×	○	○	○
C	○	×	○	○
D	○	○	×	○
E	○	○	○	×
F	×	×	○	○
G	○	×	×	○
H	○	○	×	×
I	×	○	○	×
J	×	○	×	○
K	○	×	○	×
L	○	×	×	×
M	×	○	×	×
N	×	×	○	×
O	×	×	×	○
P	×	×	×	×

Study on the privacy consciousness of family caregivers for community watching

Akihiro HIGUCHI, Shinichiro IWATA

かを、第3章同様に集計したあと、パターンによる集計を行い比較する。パターンに関しては、距離感ごとに共有できる、できないを表3に示すように16パターンに分類する。それにより、距離感と交流レベルに対する個人レベルの傾向を集計する。その後、交流レベルでの比較と、見守る場合と見守られる場合の比較を行い、共有に対する意識の差を明らかにする。また、位置情報の共有についても同様に行い、それぞれの共有に関する特徴を明らかにする。以上により、アンケート項目を分析しプライバシー意識について把握する。

3. 地域住民に求める通常時と非常時の見守り方

3.1 見守り対象者を通常時に見かけた際の見守り方

問15）の結果を図1の1列目に示す。全体的な割合では、「望み無し」が50%以上と大半を締めていることがわかる。「声掛け」では、〔相談：隣近所〕は28.4%と一番割合が多く、（挨拶：最寄り駅圏内）（挨拶：商店街や店舗）は7.6%と一番低く、交流レベルが下がったり、距離感が離れるにつれ減少傾向が見られる。「連絡」では、どの距離感においても、交流レベルが高くなるにつれ増加傾向が見られる。また、距離感によるばらつきが、交流レベルが高いほどなくなる傾向にあり、関係が低い場合、それ以上の関係を望んでいないと推察する。

3.2 通常時と非常時に求める見守り方の比較

問16）の結果を図1の2列目に示す。大きな割合の変化等は見られないが、望み無し全体的に5%ほど減少し、接触や連絡が増えている。また、通常時は交流レベルにより変化が見られたが、非常時では割合に変化が見られなかった。このことから、非常時では交流レベルに関わらず判断されており、交流レベルのほうが妥協しやすいことがわかる。距離感が離れるにつれ自宅に送ってもらうなどは迷惑がかかると判断し遠慮しているのではないかと推察する。

3.3 介護をしている際と受ける際の見守り方の比較

問）19, 20の結果を図1の3，4列目に示す。全体的な傾向として、望み無しが約5%ほど減少し、声掛けや連絡、注意が増加していることから、自身のプライバシー意識がゆるくなる傾向にあり、これらは、自分自身のことのため、あまり神経質になる必要がなくなったためと推察する。

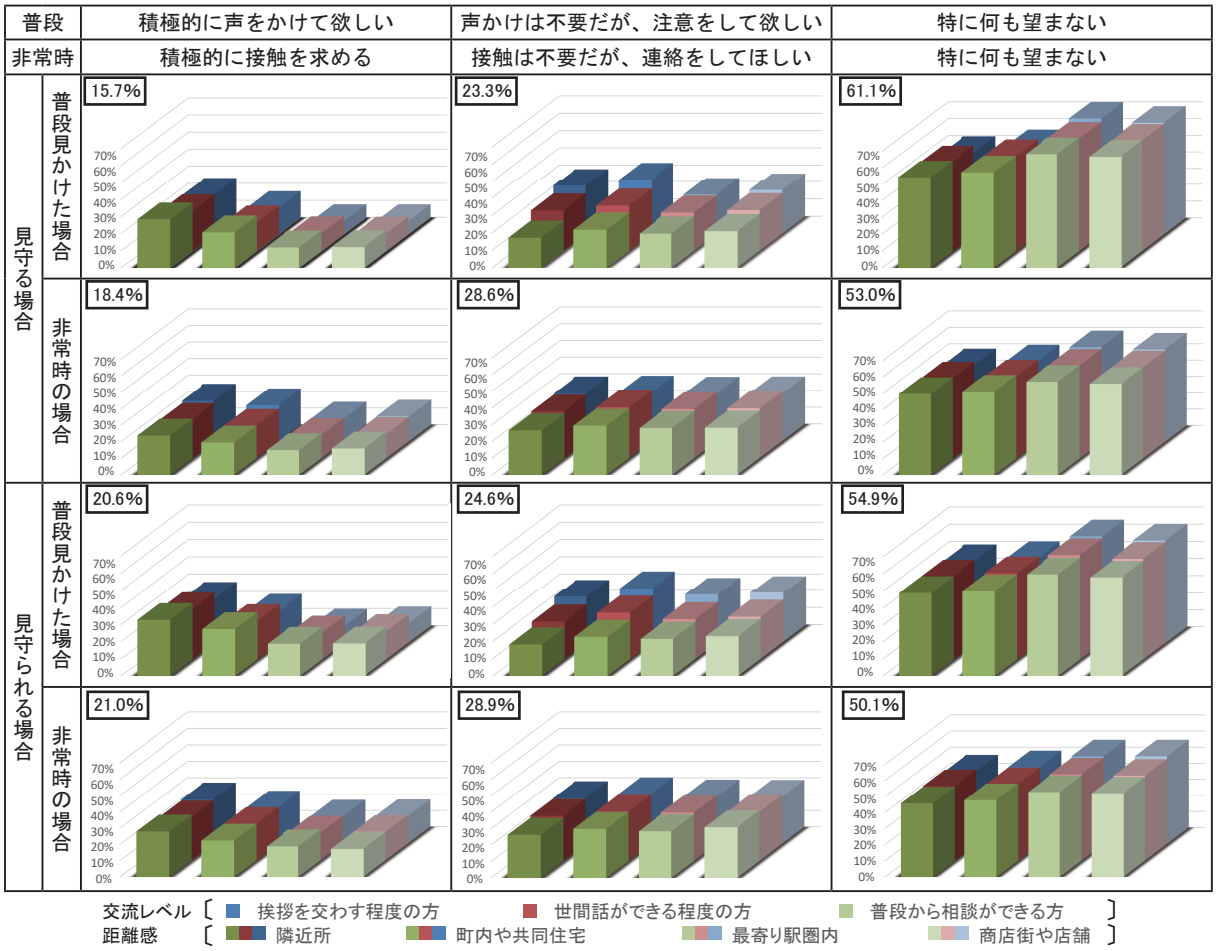

図1　見守る状況と見守る立場ごとの求める見守り方

4. 共有情報ごとによるプライバシー意識の変化

4.1. 認知症の状態の共有に関するプライバシー

4.1.1 単純集計による見守りと見守られの比較

問）14, 18 の結果を図 3 に示す。交流無しが比較的多くの回答が見られ、交流無しのほうが状態を共有しやすいことがわかる。これは、関係がないほうが遠慮なく共有できるのだと推察する。交流のあるあいさつ、世間話、相談は、どれも距離が離れるに従い、減少傾向にある。逆に、交流がない場合、距離が近づくにつれ減少傾向にある。また交流レベルでは、世間話する程度が共有しにくいことが分かった。

交流レベルで見ていくと相談が高く、挨拶が低い傾向が見られた。距離感の関係では、近い関係の方が高く、距離が遠くなるにつれ減少傾向にある。しかし、交流無しでは、町内程度の距離感の関係が一番低くなっている。このことから、交流がない場合、距離が中途半端であると、共有するメリットと、プライバシーの板挟み状態であり、結論として共有しないという思考が働くからと推察する。

4.1.2 パターン集計による認知症状態共有の比較

パターンによる分析を図 4 に示す。〔見守る場合〕の交流レベルを比較すると、全体として P の割合が大半を占めている。A においては交流無しが 28.2%で一番高く、世間話が 7.4%と低くい。また、F では交流無しだけ突出しており、H では挨拶が突出している。

〔見守られる場合〕では、距離感に関係なく共有出来る A に着目すると、相談が 40.8%と高く、次いで交流無しが 22.2%、世間話が 16.2%で挨拶が 13.4%と低い。交流がある程、共有できる許容レベルが広くなることがわかる。また、挨拶、世間話、相談の B ～ K の間では H の値が高く、交流が高くなるほど減少傾向がある。逆に、交流無しでは H は見られないが、F の値が 5.6%と確認できる。交流のない近しい関係の人は、何かしらトラブルがあったりと、一部共有したくない人がいるのではないかと推察する。

4.2 位置情報の共有に関するプライバシー

4.2.1 単純集計による見守りと見守られの比較

問）17, 21 の結果を図 4 に結果を示す。全体に共通することとして、隣近所で挨拶をする程度の人には位置情報の共有をためらう傾向にあることがわかる。また、交流レベルの比較では、町内以外の距離感において世間話の割合が低く、共有をためらわない傾向に

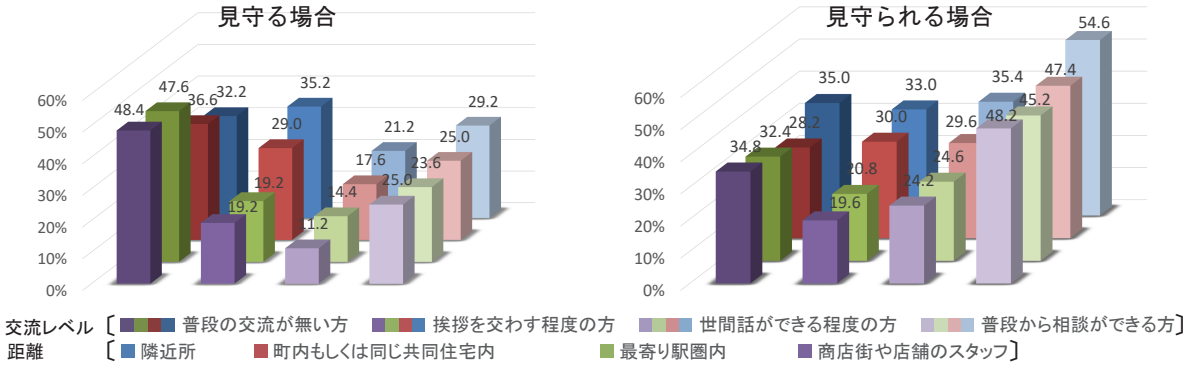

図 2　認知症状態の共有による見守りと見守られの比較

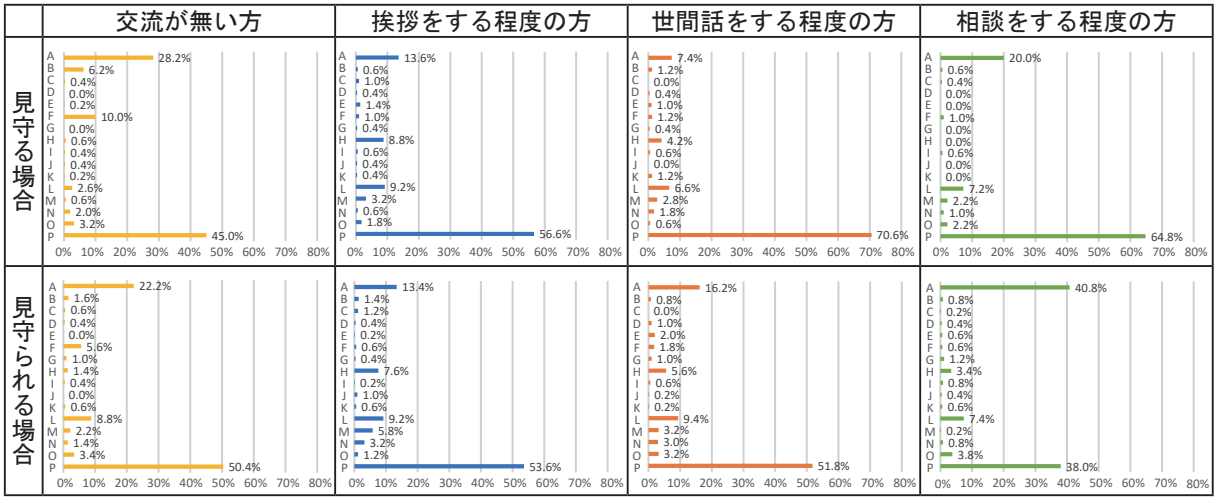

図 3　交流レベルにおける認知症状態の共有可能パターン

あることがわかる。

見守る、見守られるの場合の比較では、世間話がどの距離感においても約10%ほど減少している。逆に、挨拶と相談の最寄り駅圏内、商店街や店舗が多少減少しているものの、他に比べ変化がないため、距離感の遠い関係では、見守りと見守られによる認識の変化が少ないことがあげられる。距離感が近い場合、違った認識が働いているためであると推察する。距離感の比較では、最寄り駅圏内が割合が少なくなっている。

4.2.2. パターン集計による位置情報共有の比較

パターン集計結果を図5に示す。パターンA,L,Pの項目に回答が集中している。見守る場合の挨拶では、パターンLの回答が41.2%と1番多くなっており、近所の人のみ共有したくない人が多くいることがわかる。また、パターンPの割合は、21.8%と各項目中一番低いことが分かり、交流レベル〔挨拶〕では共有をしたくない傾向が強いことがわかる。〔世間話〕ではパターンPが57.8%と占める割合が一番高く、共有したくない人が少ない傾向にあることがわかる。

見守る場合と見守られる場合を比較するとパターンPはどの項目でも増加しており、他の項目は割合が減少している。しかし、〔相談〕の項目において、A,F,Nは増加している。いずれも、距離感は最寄り圏内や商店街の人たち居に対し共有したくないという傾向が判断できるため、交流レベルが高い距離のある人には、一部共有したくない意識が働いていると推察する。

5. まとめ

以上により、求める見守り方を通常時、非常時に置いてや、見守る、見守られるの意識などで比較することで、求めるプライバシーに偏りが見られた。また、情報共有においては、距離感や交流レベルに応じて、求める行動や許容度が変化していることが把握できた。今後は、基本情報などと合わせて、プライバシー意識が変化する要因を模索する分析を行う方針である。

参考文献

注1)「地域包括ケアシステム」重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生最後までできるように、住まい・医療・介護・生活支援が一体的に提供されるシステム

1)唐沢 かおり，高齢者介護サービス利用を妨げる家族介護者の態度要因について，社会心理学研究，第17号第1巻（2001）pp.22-30

2)厚生労働省，地域包括ケアシステム，https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/（閲覧日2021.10.10）

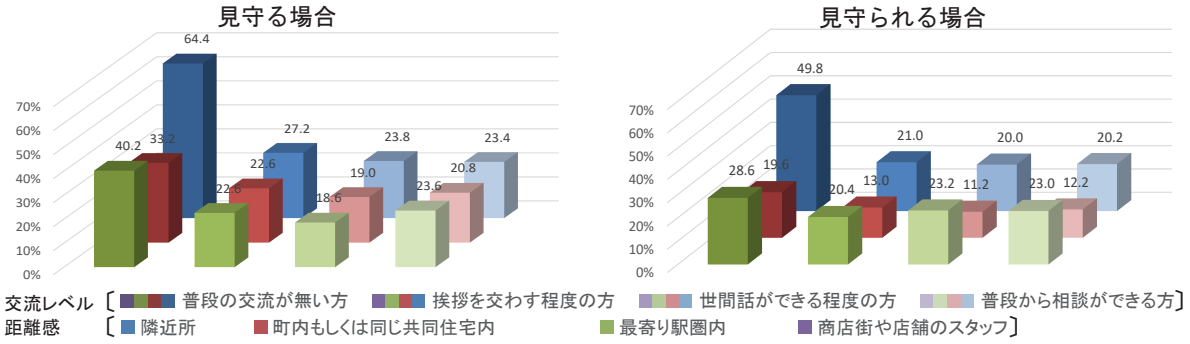

図4　位置情報の共有の見守りと見守られの比較

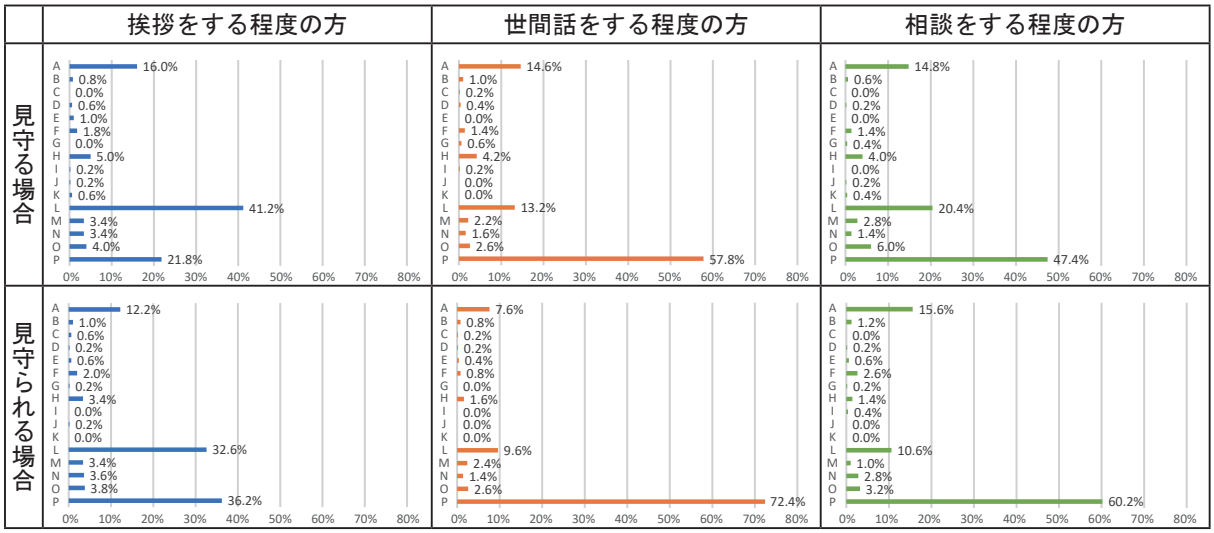

図5　交流レベルにおける位置情報の共有可能パターン